生徒の自主的・実践的な態度を育てる特別活動の在り方

日立市立多賀中学校

1　はじめに

本校では，生徒の自主的・実践的な態度の育成や，集団活動を通してより良い人間関係の育成を図ることを目標として積極的な特別活動を推進してきた。昨年度は新型コロナウィルス感染症の流行のため，例年行っている活動を削減したり，内容を変更したりすることがあった。今年度は形式を変えたとしても，ねらいを達成できる活動を意識して特別活動を推進した。

2　資料

⑴　５月，生徒から全校討論で話す議題を募集し，「みんなのメリハリをつけるために，区切りとなる時間にチャイムを鳴らしてはどうか」という議題のもと，生徒総会で全校討論を行った。討論では，「時計を見る習慣をつけることが大切」「受験のときにはチャイムが鳴らないから，反対」といった意見が出るなど，ノーチャイムの意義を改めて理解できる機会となった。生徒から出た議題について全校で話したことで，生徒は学校生活について意欲的に考えたり，自分の意見が全校に届く充実感を感じたりすることができた。

⑵　１０月，図書委員会で「図書室の活用状況を向上させよう」という議題のもと，できる企画を話し合った。そこで，本の内容の一部を抜粋したものから本のタイトルを当てるという通称「図書フェスクイズ」を行った。実際に本を手に取らないと正解できないということで，普段読まないような本を手に取る生徒が増えた。

⑶　１１月，かしわ祭（文化祭）では，合唱コンクールの他に展示発表，有志によるステージ発表を行った。生徒会役員会では「ステージ発表を盛り上げるためにできることはないか」という話合いから，「自分たちが出場しよう」ということになった。さらに話合い，内容を考え“大きなカブ～生徒会 Ver～”という劇（文化祭に行きたがらない生徒をみんなで連れ出す話）を行った。自ら発案・実践したことで，考えたことを形にできたという充実感を得られた。

3　成果と課題

○　学校アンケート設問「私は，当番や係，委員会活動，また，学校行事等に進んで取り組み，学級や学年，学校がより良くなるようにしている。」に対して，「あてはまる・ややあてはまる」を合わせた割合が 93.2%だった。多くの生徒は集団がより良くなるために自ら活動していると考えていることが分かった。

○　With コロナの精神が根付いてきており，委員会や係活動において「現況のもと，どのように工夫して活動できるか」という考え方が自然にできるようになってきている。

●　生徒会役員会の発案で，全校生徒から意見を取り入れるため目安箱を設置した。記入例などをつくり，放送でも呼びかけたが，意見が一つも入らなかった。原因が学校生活への関心の薄さなのか，学校生活に満足しているからなのか，それ以外なのかについては探っていく必要がある。